健幸plus+
市立総合病院からのお知らせ

病理医をご存じですか？



病理診断センター　センター長
鈴木　潮人

内科医や外科医と比べると、病理医という医師をご存じの方は少ないかもしれません。病理医は「病気が良性なのか、悪性なのか」といった判定（病理診断）を専門とする医師で、その仕事は多岐にわたります。今回は、その中から「生検の診断」についてご紹介します。

胃カメラの検査を受けて、主治医から「検査の結果をお知らせしますので、1週間後に来てください」と言われた状況を想像してみてください。次回の外来で「検査の結果、がんでした。1か月後に手術となります」と告げられるかもしれません。この短い言葉の裏側に、病理診断が隠されています。

胃カメラで病気がありそうな部分から採取された、直径約2ミリメートルの胃の組織（生検材料）は、ホルマリンに入れられ検査科に提出されます。そこで、国家資格を持つ臨床検査技師が検体をパラフィン（蝋）で固め、1ミリメートルの千分の2という薄さにスライスします。さらに、これをガラス板に貼り付けて染色し、カバーガラスで蓋をしてようやく標本（プレパラート）が完成します。

その後、病理医が顕微鏡で標本を観察し、正常な胃の組織や細胞とどこが違うかを比較して、がんであるかどうかを診断します。この際、特殊な染色や遺伝子検査が必要になることもあり、その場合は最終診断までにさらに日数を要します。

病理診断には「速さ」と「正確さ」の両方が求められます。私たちは、その両立に向けて日々努力を重ねています。「検査の結果、がんでした」という短い言葉の裏側で、こうした医師や技師が働いていることを知っていただければ幸いです。



家康だけじゃない 信長、秀吉にもゆかりある磐田



磐南文化協会理事
冨田　泰弘

令和5年のNHK大河ドラマ「どうする家康」では、数々の苦難と向き合い、涙しながらも乗り越えていく徳川家康の姿が印象的でしたが、その波乱万丈の生涯において、市内の「城之崎城」と「中泉御殿」は家康の未来に大きな意味を持つ場所となっています。

若き日の家康は、かつて国分寺や国府が置かれ、戦国時代には遠府や国中として栄えた見付を遠州攻略の拠点とするため、現在の磐田城山球場の地に「城之崎城」を築きました。

しかし、一説には同盟者の織田信長による「異見」から、「愛は然る可から不」（『三河物語』）と記す不適地と判断され、浜松城を築き居城としたことで、三方ヶ原で武田信玄に大敗した際も籠城して九死に一生を得ています。

一方、JR磐田駅南西にあった「中泉御殿」は、家康が好んだ「鷹狩」を、大池周辺で行う際の宿所として築かれたとされます。さらに史料からは、晩年の家康にとっての集大成ともいえる関ヶ原の戦いや大坂の陣の軍略を練り、天下泰平を目指す作戦の場としても機能していたことがうかがえます。

これだけでも磐田は家康ゆかりの地と言えますが、信長は「みかの坂尓御屋形立置一献進上」（『信長公記』）とあるように、三ケ野の坂上から小笠山方面を眺めながら、家康と一献酌み交わしています。

また、今年の大河ドラマの主要キャストである豊臣秀吉も、関東へ向かう道中に、「見付のこうの」（『石川正西聞見集』）と記す国府跡の御茶屋に宿泊しました。

このように磐田は、戦国時代の三英傑とゆかりがある地であり、教科書で学ぶ偉人たちがその昔、私たちのすぐ近くを歩いていたのかもしれません。